

佳作

「人間ドックには神様がいた」

山田 幸子さん

「神様」なんて実在しないと解っていても、困ったときなど心の頼りどころとして手を合わせては、見えない偉大なものをお願いをしてきた。それが現実存在したとしか思えないような体験をした。

忘れもしない7年前の12月17日、突然大きな音で電話が鳴った。「厚生連の医師のAですが、先日の胃カメラの検査結果を今日の午後3時頃お知らせしますが、来られますか」との電話だった。動揺している私に優しい言葉で「大丈夫ですよ。受診のときにお話しします。」とのことであつた。「先生から直接電話が入るなんて悪い結果なんだ！」と、不安は大きく膨らんで足が地につかないフワフワした状態であつた。フィルムを診ながら、先生のゆっくりと丁寧な説明を聴いていると、不思議と気持ちが落ち着いてきた。「内視鏡の上手な先生を紹介します。」と、この先生なら大丈夫と安心感を与えて下さった。

次の日、紹介状を持参して受診したところ、その医師も優しい口調で説明して下さい「よくこんなに小さな病巣を見つけた。普通なら見落としてしまうのに。」と言ひ、見つけたA医師に対して「さすが！」というような尊敬の表情だつた。その様子を見て、私には見つけて下さつたA医師が神様のように思われた。一刻も早い手術を希望したが、予定が一杯で私の番は随分後になってしまった。医師は「半年ぐらいは大丈夫だよ。」なんて呑気なことを言っていたが、私の焦る気持ちは日増しに強くなった。癌は早期発見、早期治療が何より大切なのに、これでは折角の早期発見も台無しとなってしまうのではないかと必要以上のストレスが溜まりはじめ、眠れない日が続いていった。思い出してもこの時期が心身共に一番落ち込んだ時だつたと思う。

やつのことで手術の日程が決まつた時は、何とも言いようのない安心感に包まれ、その日が待ち遠しく、全てから解放された素敵な日が来るように思

えた。手術も無事終わり、今年でちょうど満7年目を迎えた。内視鏡手術の県下ナンバーワンの医師の手術を受けられた幸せ者の気分を味わった。焦る気持ちで病院を変えなくてよかったと思った。励ましてくれた主人をはじめ多くの人たちに感謝の気持ちで一杯だ。

「人間ドックへの行動がラッキーだったのか。」「腕のよい手術医のお陰なのか。」「小さな病巣を見つけてくれたベテラン医師のお陰なのか。」「健康チェックの場を与えてくれた行政のお陰なのか。」いろいろの「お陰」が繋がっていて私は今健康を享受している。私にとっていくつもの「お陰」が神様であるが、やはり結果的には小さな病巣を見つけてくれた「人間ドック」そのものが神様である。

健康寿命を延ばすためにも、今後も継続して「神様」に会いに行きたいと思っている。と同時に、経験を通して「人間ドック」の大切さを機会あるごとに多くの人たちに伝えていきたいと思っている。

人間ドックには、神様が宿っていたのである。